

## 1. 少女時代：「カラス」になる前のマリア

1923年12月2日、マリア・カラスは、ギリシャ系移民の両親のもと、ニューヨークに生まれた。生来の彼女の名は、マリア・カロゲロプーロウであった。

13歳のとき両親は別居。娘の音楽的な才能に野心を抱いた母親がマリアと彼女の姉をアテネに移住させた。アテネでマリアは僅か15歳でオペラへのデビューを果たし、エルヴィラ・デ・イダルゴに学ぶ。イダルゴは、かのエンリコ・カルーソーとも共演したスペイン人のソプラノであった。マリアは熱心でひたむきな学生であり、持ち前のけた外れの才能を伸ばし始めた。

大戦下のアテネで、この若いソプラノは、プッチーニの《トスカ》の主人公やベートーヴェンの《フィデリオ》のレオノーレといった、大変な労力を要する役柄を演じた。1945年にマリアはアメリカに戻り、前評判の高かったシカゴの新しいオペラ・カンパニーで、こけら落とし公演の《トゥーランドット》に主演すべく選ばれた。しかし、このカンパニーが、初日を迎える前に破産してしまったのである。

しかし、そこで運命がマリアの側に付くことに。イタリアから、ヴェローナ野外劇場のオペラ・フェスティバルに出演させるべく、新人をスカウトしに来ていたヴェテランの大テノール、ジョヴァンニ・ゼナテッロに見出されたのである。カラスは1947年に同地でイタリアのオペラ界にデビュー、ポンキエッリの《ラ・ジョコンダ》に主演した。このときの指揮者、トゥリオ・セラフィン、彼女のキャリアに決定的な役割を果たすべく運命づけられていた。

## 2. 大変貌を遂げる

1947年にヴェローナにデビューしてから、カラスはイタリアを中心に活躍。富裕なビジネスマンのジョヴァンニ・バティスト・メネギーニと結婚した。彼女に影響を与える指揮者は、ヴェローナの時からトゥリオ・セラフィンであったが、彼はマリアの音楽面における助言者になった。

彼女は、トゥーランドットやアイダ、ノルマ – さらにはワーグナーのイゾルデやブリュンヒルデまでも – といった力強いヒロインの役で定評を得るようになったが、1949年に新しい扉が開かれることに。ヴェネツィアのフェニーチェ座において、マリアは、ベッリーニの《清教徒》のエルヴィーラという、繊細かつ華やかな役柄を、あるソプラノに代わって出演したのである。

彼女は、センセーショナルな成功をほしいままにし、そのことが初めてのレコーディングにも結び付き、イタリア中の一流歌劇場からゲストとして呼ばれるようになった。その中で最も偉大な歌劇場はミラノのスカラ座。マリアは中南米でも、特にメキシコ・シティにおいて、観客にスリリングな感動をもたらした。

カラスが、初めて《椿姫》のヴィオレッタ役を歌ったのは1951年のこと。その翌年から彼女のキャリアに弾みが付き、カラスは肉体面でも大変貌を遂げるべく乗り出した。18か月で彼女は体重を30キロ落とし、舞台上でもオフ・ステージでも、際立って優雅な印象を与えるようになった。「彼女は別人の如き女性になった」と指揮者のカルロ・マリア・ジュリーニは語った「そして、別次元の表現法が彼女に開かれたのだ。．．あらゆる面において、彼女は変化したのである」。

## 3. スカラ座のプリマドンナに

ミラノのスカラ座は、イタリアで最も偉大な歌劇場である。そこでは、ベッリーニの《ノルマ》やヴェルディの《ナブッコ》、それにプッチーニの《蝶々夫人》といった作品の世界初演が行われた。

マリア・カラスはスカラ座に、1950年の《アイダ》でデビューした。彼女はそれからすぐ、この歌劇場のプリマドンナ・アッソルータ（最高のプリマドンナ）になり、10年のうちにシーズン・オープニングで6回にわたって主演を務めた。特別な大勝利が、演出家のルキノ・ヴィスコンティとの協力関係によって運命づけられた。最も有名なものといえば、ベッリーニの《夢遊病の女》、ヴェルディの《椿姫》、そして1957年のドニゼッティ《アンナ・ボレーナ》。これはひょっとしたら、彼女のスカラ座との関係の頂点を極めたものかもしれない。

その翌年、カラスと、スカラ座の総裁アントニオ・ギリンゲッリの間には深刻な緊張が走った。ベッリーニの稀にしか上演されない《海賊》の公演が、事態をはっきりとさせることになった。カラスがカーテン・コールを終了させるよりも前に、ギリンゲッリの命で、舞台の安全幕が降ろされたからである。

カラスはスカラ座に1960年に復帰し、そのシーズンのオープニングを、これまた珍しい一作、ドニゼッティの《ポリウト》で飾った。そして、1962年には、スカラ座最後の登場として、炎のごとく激しいケルビーニの《メデア》に出演している。

1950年代を通じて、スカラ座は、カラスが最も有名な録音を数多く成し遂げたという地でもあった。それらの最高傑作は、おそらくは《トスカ》。1953年に録音され、ヴィクトル・デ・サバタが指揮したそれは、異論なく、第一級のものであり続けている。

#### 4. 「伝説」を録音して

カラスが最初にその伝説を打ち立てたのは歌劇場においてであった。歌う女優として完璧であり、歌唱の表現力を反映しつつ高めもするといった身体表現を行ったのである。

しかし、彼女の伝説を維持し、普及させたのは彼女のレコーディングなのである。カラスが最後にオペラに出演してから50年以上経ったというのに、彼女は何百万人もの耳をくぎ付けにし続けている。聴き違えることのない声、劇的な洞察力、芸術家としての鋭敏な手腕と真のカリスマ性によって。

カラスは、1949年に初めて、レコーディング・スタジオに足を踏み入れた。それからの15年間、彼女は自分の最も有名な持ち役をほぼすべて録音した。例えばノルマ、ヴィオレッタ、ルチア、メデア、そしてトスカ。それと共に、彼女は劇場で出演することのなかったオペラも録音している。その中には、《ラ・ボエーム》、《道化師》、《マノン・レスコー》といった作品があるが、その中で最も人々の興味をそそめるものは《カルメン》であるかもしれない。これらの録音において、彼女と共演した人々の中には、同時代の最も偉大なる指揮者や歌手たちが何人もいる。

また、世界中の歌劇場やコンサートホールで録られたライブ録音や、個々のアリア集も、「録音の宝物」なのである。マリア・カラスは、純粹に音を通じて、彼女の劇場における魔力というものを漏らさず伝えることが出来た。「私が言わねばならないことのすべては、音楽の中にあります。私の録音にその全てがあるのです」と彼女自身も言っている。

## 5. 歌の女神: 栄光の年月

イタリアのファンは、カラスのことを「歌の女神、ラ・ディヴィーナ」と呼んだ。この大ソプラノはまさしく、オペラ界に女神のごとく君臨した。ミラノ・スカラ座が彼女のオペラ活動の本拠地となる一方で、欧州や北米の名だたる歌劇場も彼女を招いた。

彼女は、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場では1953年に初めて歌い、その翌年にシカゴのシヴィック・オペラ・ハウスにデビューした。1955年には初めてベルリンで出演し、かのヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮台に立った。1956年にはウィーン国立歌劇場に登場（訳註：カラヤンの指揮で、スカラ座の訪問公演の一環として）、最後に、彼女の生まれ故郷のニューヨークで、メトロポリタン歌劇場の舞台に立ったのである。

彼女はまた、マスメディアの恰好の餌食になり、時にはきつい態度を見せ、激しやすくなることも報道された。1958年の年初のローマでは、病気により、イタリア大統領が出席する《ノルマ》の特別公演を途中で打ち切りにしたことから、非難の嵐が巻き起こった。同じ年の11月には、メトロポリタン歌劇場のジェネラル・マネージャー、ルドルフ・ビングと論争になったことが、新聞の見出しを飾った。

1958年の年末、カラスはパリ・オペラ座にデビューし、そのシーズンで一番の社交界イベントである、目を見張るほどの華麗なコンサートに出演した。この時、客席には、彼女の人生をやがて変えてしまう男、ギリシャの船舶会社の大富豪、アリストテレ・オナシスがいた。

## 6. 心の問題

オペラ界の至高の「歌の女神」としてその芸術性が頂点にあったころ、マリア・カラスはうっとりさせるような魅力も放つ存在になっていた。しかし、プライベートの人生においては、エキサイティングな瞬間というものほとんど訪れずにあっただ。1949年に、彼女は、30歳ほども年上の男、ジョヴァンニ・バッティスタ・メネギーニと結婚し、それで心の安定を得ていた。夫はレンガ製造工場を営んでいたが、のちに妻のマネージャーになった。

1959年に、メネギーニ夫妻は、アリストテレ・オナシスの豪華なヨット、クリスティーナ号のクルージングに加わるよう招待された。ほかの客たちの中に、英国の偉大な政治家であるウィンストン・チャーチルが居た。カラスに、新境地が拓かれた - とりわけ、魅力的で精力的であるギリシャ人の主催者と彼女の間不思議な作用が働いた結果。オナシスは既婚者であったが、そのクルーズからわずか数週間ののち、カラスは夫の元を去った。

カラスのオナシスとの関係はしばしば激しやすなものになったが、9年間続いた。彼女は自らのエネルギーをオナシスと有閑上流階級での暮らしに捧げたので、出演スケジュールの方は激減してしまった。のちに彼女自ら語ったところでは「私はとても長い間鳥かごの中に居たようなもの。だから、アリストや彼の友人たちに出会ったときから、違う女性になってしまったのよ」とのことである。

彼女はオナシスと結婚し子供を儲けることを夢見ていた。しかし、1968年に、彼は突然、暗殺されたアメリカ大統領の未亡人であるジャクリーン・ケネディと結婚してしまった。カラスは侮辱された形になり、彼女の望みも打ち砕かれたのである。

## 7. 幕が下りる

カラスがアリストテレ・オナシスと1959年に出会ってから、彼女の出演は稀なものになっていった。声もより脆くなった。彼女の芸術性は、以前よりもさらに洗練されたものになっていたにも関わらず。

カラスが最後に舞台上で演じた二つのオペラは、ロンドンでの《トスカ》とパリでの《ノルマ》である。両方とも、フランコ・ゼッフィレリが演出した。「カラスの魔術は、ごく少数のアーティストのみが持つクオリティである」と彼は言った。「マリアは、常に奇跡であったのだ」。

カラスの最後のオペラへの出演は、1965年ロンドンでの《トスカ》である。彼女はその後パリに住み続け、事実上の引退状態にあったが、ギリシャ神話の『魔女メデア』のストーリーが映画化された際には主演し、その間にも数多くの音楽的なプロジェクトの可能性が模索され、実際に、いつかのアリアが録音されもした。1973年にはカラスは、テノールのジュゼッペ・ディ・ステファノと共にコンサートツアーを行い、欧州、北米、韓国そして日本を訪れた。しかし、その時の彼女は、彼女自身の影法師のように見えたのである。

カラスの人生最後の日々は、孤独であり、健康状態も不安定になっていた。1977年の9月、彼女の死のニュースが世界を驚かせた。死因はおそらく心臓発作によるもの。その時、カラスはまだ53歳であった。トスカの名アリアの言葉が、人々の心に必然的に浮かび上がったのである。「ヴィッシ・ダルテ、ヴィッシ・ダモーレ：私は芸術に生き、愛に生きて参りました」。

## 8. 不朽の名声

その死から40年以上も経つというのに、マリア・カラスは、あらゆる世代のオペラ・ファンの心に、まさしく、生きる存在であり続けている。彼女ほどに、聴き手の想像力、そして心を刺激するアーティストはほとんど居ないだろう。音楽の真実とドラマの真実に対して彼女が妥協せずに探究したからこそ、カラスは、「歌う女優」と定義されたのである。

カラスはオペラ界のイメージを変え、オペラの歴史を発展させた。人によっては、「カラス前 / カラス後」という言葉を用いて語ったりもするのである。彼女の業績を通じて、19世紀前半のベルカントの作曲家たちに新しい評価がもたらされた。今日、ロッシーニやドニゼッティ、そしてベッリーニのオペラは以前よりもはるかに広く上演されるようになっている。数多くの歌手たちが今や、難しいベルカント唱法のスタイルにおいて秀でた存在となっているのである。しかし、カラスは今なお、至高の地位に君臨している。

高名な歌手たちも - とりわけソプラノたちが - 繰り返し、自分たちがオペラ界で生きようになったのは、カラスの影響だと口にする。カラスは決して、生徒を個人的には取らなかったが、ニューヨークのジュリアード音楽院では、1971年（訳註：正確には、1971年から1972年にかけて）に有名な公開マスタークラスを開催した。カラスの歌声は、いまだに新しい世代の演奏家を育て続けており、新しいファン層をも魅了し、感動させ続けている。まさしく、彼女自身が輝き続けるのと同様に。

## 9. ホログラムツアー

遺された録音を通して今もなお生き続けているマリア・カラスが、画期的なワールドコンサートツアーによって鮮やかに甦ります。BASE Hologramが提供するマリア・カラス・イン・コンサート～ホログラムツアーでは、女神マリア・カラスの絶頂期の舞台における神秘的な魅力が3Dホログラムによって余すところなく再現されます。

革新的な技術を駆使し、熟練のサウンドエンジニア達によるチームが録音からカラスの声を抽出することに成功しました。その成果とショーの演出とが結びつき、ベッリーニの《清らかな女神よ（カスタ・ディーヴァ）》、プッチーニの《歌に生き、愛に生き》、ビゼーの《ハバネラ（恋は野の鳥）》ほかマリア・カラスの代表的なアリアの歌声が、オーケストラの生演奏とともに、オペラの伝説の化身にふさわしい舞台に今一度甦ります。

このホログラムコンサート体験は、新たな世代のオペラファンがマリア・カラスの圧倒的な存在感をこの目で確かめるチャンスであり、カラスの芸術性と一生に相応しい華麗な演出でその遺産を今に伝えるものです。